

今年のシンポジウムに寄せて
一ベースナリティーを

追求しよう！

飯 塚 博 久

農民は保守的だということが口ぐせのようにいわれる。それは農業という職業上の宿命的な性格からもたらされる結果か、それとも農民をとりまく社会経済的な仕組みがそうさせている結果なのか、いずれにしても全国民をして政治に参加せしめたという安保問題の大きな流れの中でも、大多数の農民は動かなかつたのが現実である。

こうした農民集団をみた時に、私は徳川幕府の農民の生活規制を示した「慶安御禁書」の一章一節を思い出す。徳川幕府は武士階級の生活の物質的基盤が農民の年貢の上におかれていたため、生活のすみすみにわたつて農民の生活を規制した。農民生活の破壊は武士の困窮に連なるため、農民保護の名目で彼らを大切に、「謂所・百姓は生かさぬよう、殺さぬよう」した。このことが究極において武士階級の生活維持にあつたのはいうまでもない。

して要求されてくるのである。選舉における部落推せん、郷土の代表という語句の裏側の仕組みがここにかくされている。

この時代で農業経営をのばそようとすれば、この新らしい時代の洗礼を受けた人でなければならぬ。当然の結果として若い世代の優位性というものがますます強化されてくる。元来、農業というものが主觀的・經驗的・伝統的技術に支配されていたのに較べて多くの新らしい現象が出現したのである。

すでに二十代にして農業の經營者の感覚をもつたバースナリティーが農村のあちらこちらでできあがっている。こうしたバーソナリティーの政治意識、政治経営が保守か革新かの

一応、こうした制度が明治維新によって解消したとはいっても、農民の社会経済的地位は、明治初期の地租改正が従来の封閉的な土地経済の資本主義的改編であり、今までの零収入が政府収入に変つただけのことしかなかつた。

こうした歴史の流れが、農民のベースナリイテー形成に全く無関係であるとはいえない。長い間、農村社会学において、村落共同体を一つの主題として捉え、その追求が試みられたのも、時代の生産過程、生産様式に適合した農民の生活のための手段としての共同体があつたからで、共同体内での農民の「われら」

代と、五六十代の経営主の世代の断層である。これを老若の対立とか新旧思想の対立とか考察するが、最近の農村の動きはそうして単純論理だけでは割り切れないものがある。戦後の合成化学の発展に伴う各種の新らしい農業の出現、農業機械の発展改良、そして普及はめざましいものがある。さらに工業生産の発展に伴うシエーレの増大からくる都市と農村の生活水準の差は農家人口の移動をよぎなくするばかりか、資本主義社会での大量生産方式の優位性を農民にも意識させ、農業における經營組織の変化をもたらし始めている。

いずれの方向づけをもつかは、村落共同体の制約なしに農業政策のしからしむる結果、生み出されてくるのではなかろうか。(現在の空文化した農業政策にも数多くの問題があるが――)。

そこに資本主義体制下における農民と政治の結びつきの一面が現われてくる。

若い独立自営農民のパーソナリティーを探在時点として、歴史の流れの中での村落共同体の変化を対決させて農民と政治の問題を通してみてみたいと私は考える。そこに農民は保守的であるという慣例句を打ち破るもののが幾つもあると考へるからである。

こうした歴史の流れが、農民のバースナリイテー形成に全く無関係であるとはいえない長い間、農村社会学において、村落共同体を一つの主題として捉え、その追求が試みられたのも、時代の生産過程、生産様式に適合した農民の生活のための手段としての共同体があつたからで、共同体内の農民の「われら意識」の強さがそれを証明してくれる。そればかりが共同体の存続に必要な秩序維持が、農民の共同体内の行動における最高の原則と

普及はじめざましいものがある。さらに工業生産の発展に伴うシェーレの増大からくる都市と農村の生活水準の差は農家人口の移動をよぎなくするばかりか、資本主義社会での大量生産方式の優位性を農民にも意識させ、農業における經營組織の変化をもたらし始めていたる。

こんなに農業というものがダイナミックに動くのは最近では明治の地租改正以来のことである。